

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：谷村 要 作成日：2025年1月6日

1. 教育の責任

大手前大学現代社会学部のカリキュラム・ポリシーである「国内外の社会現象を教育研究の対象とし、現代社会の諸課題を発見・理解できる基礎力を備え、社会で活躍できる人材」を「養成」することを踏まえながら、私自身の専門領域（情報社会学、メディア・コミュニケーション研究、ファン文化研究）に関連した以下の教育実践を進めています。

- (1) 課題の発見・理解のための土台となる社会学およびメディア・コミュニケーション研究、ファン文化研究の理論についての教授
- (2) コアカリキュラム科目現代社会の具体的事象（特に情報メディアが社会に及ぼす影響）を踏まえた課題の提示
- (3) 社会事象の諸課題をとらえるための社会調査法の実践と指導
- (4) 自ら発見した現代社会の課題を踏まえた論文（レポート）の指導

2024年度に指導した科目は以下の通りです。

【通学課程】

授業科目名	科目区分	レベルナンバー	履修人数
ゼミナールⅠ	コアカリキュラム科目	300	4
ゼミナールⅡ	コアカリキュラム科目	300	4
卒業研究	コアカリキュラム科目	400	15
情報メディアと社会Ⅰ	メディア・コミュニケーション専攻選択科目	100	20
メディア学入門Ⅰ	メディア・社会学専攻選択科目 メディア・コミュニケーション専攻選択科目	100	142
メディア・コンテンツと地域	メディア・社会学専攻選択科目	200	21
出版メディア論	メディア・社会学専攻選択科目 メディア・コミュニケーション専攻選択科目	200	96
デジタルメディア論	メディア・社会学専攻選択科目 メディア・コミュニケーション専攻必修科目	300	22
メディアデザイン演習	メディア・コミュニケーション専攻必修科目	400	12

【現代社会学部通信教育課程】

授業科目名	授業方法	レベルナンバー	履修人数
ジャパノロジー入門	通信教育	100	496人
調査研究方法Ⅰ	通信教育	200	152人
地域デザイン演習	スクーリング	300	12人

【大学院比較文化研究科】

- ・ 博士課程前期課程のゼミ（「比較文化特別研究Ⅱ[研究指導]」）では2名、研究生2名を指導。博士課程後期課程のゼミ（「比較文化特別研究[研究指導]」）では1名を指導。
- ・ 他に「文化・社会特殊研究Ⅰ」を担当（履修人数：8名）。

2. 教育の理念

多くの研究者がそうであるように、自分自身と社会をよりよい方向に向かわせるために学問はあると、私は考えています。私の専門は、情報社会学とファン文化研究ですが、ではこの学問はどのように社会をよい方向に向かわせる効果があるといえるでしょうか。

メディア研究の考え方では、情報技術（情報メディア）はただの道具や表現手段ではないと考えます。人間社会は、技術に影響されて考え方や社会そのものを変えていくからです。たとえば、スマートフォンが普及するまでは「ながらスマホ」という言葉はありませんでしたし、駅の構内アナウンスで注意をうながすこともありませんでした。スマートフォンが普及したことで、歩きながらスマートフォンに夢中になる人が増えたから、そのような言葉がつけられ、アナウンスがされるようになったのです。「何を当たり前のことを言っているのか」と思うかもしれませんが、これは私たちが技術によって社会の形を変えていくことの一つの事例です。この「ながらスマホ」が問題化されるようになったことで、それまで勤勉の象徴として学校に置かれていた「薪を背負って（仕事をしながら）本を読む二宮金次郎」が「ながらスマホ」を助長させるものとして問題になるようになりました。ここから言えることは、人びとは技術によって感覚や考えを変えていき、それにあわせて社会の形（社会にとって「よい」とされるもの）も変えるということです。このように、現代社会ではさまざまな新しい技術が開発され、普及していくことによって日々その社会の形を変えつつあります。情報メディアの持つ影響力を理解していくための力を身につけることは、社会で起こっている新たな「変化」を見つける「武器」になります。この「武器」があれば、いち早く社会の「変化」にあわせた政策の提案やビジネスチャンスの獲得ができます。それは自分のためにもなりますし、社会の発展にも寄与します。これが「自分自身と社会をよりよい方向に向かわせるため」の学問のあり方です。

情報技術の発展は、また従来はメディア作品（マンガ・アニメ・ドラマ・アイドル等）の消費者とみなされていたファンの姿も変えつつあります。ご存じのように、ファンはただ作品を消費するだけでなく、現在ではSNSなどで作品の解釈などを発信しファン同士で交流して、空間を超えてファンの輪を広げています。インターネットが普及する前は、ファンの声はバラバラでしたが、今は結びつくようになったことで、ファンの声を作品の作り手側は無視できなくなっています。ファンが以前より強い力を持ったのです。このことを踏まえて、現在では、ファンの文化の実態を対象とする研究がさかんになっています。ファンの動向を把握することはビジネスにつながりますし、新しい作品づくりのヒントになります。またファンが応援する対象を「推す」ことで得られる幸福感を研究することで、困難さを多く抱えた現代社会を生きる人々の助けになるヒントをそこから得られるかもしれません。このような形でファンを研究することも「自分自身と社会をよりよい方向に向かわせる」ことにつながります。

一方で、私は以上のような考えを踏まえながら、「聖地巡礼」とそれにかかわる人びと（ファン・地域・事業者・コンテンツ権利者）をテーマにした研究を進めています。アニメやマンガ等ポップカルチャーの縁のある場所を巡る「聖地巡礼」においては、その場所の意味がファンの実践によって塗り替わっていく状況があります。そのとき、ファンはどう行動するか。そこに住まう地域住民はどう対応するか。「お客さん」を獲得できる可能性が広がる事業者はどう動くか。コンテンツ権利者の反応はどうか。このようなテーマに取り組み、聖地巡礼のメカニズムの図式化をめざしています。2024 年度からは科学研究費・基盤研究（C）にも採択されましたので（課題名「コンテンツツーリズムの「集合知」を形成する「解釈共同体」の実態調査研究」）、その調査実践・成果を活かした教育活動を推進していきます。

これら学問分野の意義を念頭に、自らの研究にもとづく具体的な成果や醍醐味を学生に伝え、社会に対する問題意識の涵養や調査実践や地域活性化実践などに積極的に関与してゆく姿勢を育てることを目指します。これらの教育活動を通じて、社会をとらえるためのユニークな視点を獲得し、社会学や社会調査法など学問的知見を活用し社会を良い方向へ向かわせるための能力を育成します。

3. 教育の方法

社会をとらえるためのユニークな視点の獲得と、社会学や社会調査法など学問的知見を社会で活用するための能力を育成するために、以下の方法をとります。

1. 学生が関心を持ちやすそうな事例を授業内や課題で取り上げ、社会学では「こんなことも研究対象になる」ことを気づかせる（「学ぶ」）
2. 社会学やファン研究の先行研究の知見を活かして、具体的な事例を分析する方法を伝え、課題で分析のための実践経験を積ませる（「考える」）
3. クラス内で自らの見解を他者に伝える（アウトプットする）経験を積ませる（「伝える」）
4. 教員がコーディネートした実社会と接する域学連携活動や調査活動、学内イベントなどに、学生に参加してもらう（「参加する」）

私は「教育は折にふれて」というマンガ「鈴木先生」第 1 話で示された言葉を教育方法の方針としています。「教育はさまざまな機会の中で施すもの」という意味として理解していますが、そのためにはさまざまな機会（「折」）を学生に与えてゆく仕組みづくりが必要だと考えます。ですので、上記「学ぶ」「考える」「伝える」「参加する」という機会をできる限り用意して、学生に成長するための機会を創出するように工夫しています。

具体的には、授業内でポップカルチャーや時事的な話題や学生にとって身近な話題を取り上げ、その話題と学問的知見を結び付ける学びを展開し、課題等で学生が考える機会をつくります。また、文章や口頭で言語化する機会をつくり（グループワークやクラス内発表、el-Campus のディスカッション機能や課題レポート機能を活用）、他者に自分の考えを伝える機会をつくります。さらに、授業内で培った能力を活用するための実社会と接続させた活動（たとえば、京丹後市での域学連携事業や、沼津市など私の研究フィールドでの調査実践など）に参加する機会も用意しています。

4. 教育の成果

これまでの教育実践の中では、学生に、調査成果を学会大会（第 15 回教育コミュニケーション学会全国大会）で発表してもらったり、地域の PR のためのパンフレットや映像の制作やご当地キャラクター（京丹後七姫）のデザイン創出に関わってもらったりしてきました。今後も学生が成長するための「折（機会）」の提供に努めていきたいと考えています。



根拠資料：学生がデザインした京丹後七姫がラッピングされたバス（左）、第 15 回教育コミュニケーション学会全国大会での学生の調査成果報告の様子（右）

このような活動に参加することで、学生は教員の創造を超える成長をとげることがあります。その成長を見ることが教員として最大の喜びです。

5. 改善への努力と今後の目標

授業運営上における課題は、授業で取り扱う内容が多いために、どうしても情報詰め込み気味の授業を展開していること、大学から遠方での学外での活動に参加することによる学生負担の大きさ（それによる学外活動への参加者減少）である。どのようなバランスで授業を展開すべきか、「3. 教育の方法」で示した方針を踏まえながら調整していきます。

そのために、まずは履修者に授業の目的を丁寧に説明するとともに、授業内容を精査して、さらなるスクラップ&ビルドを進めるつもりです。

【添付資料】

- ・ LMS (el-Campus) や Teams での配布資料
- ・ 谷村要（2017）「地域とかかわる PBL への試み ～京丹後市域学連携事業での活動を事例として～」『大手前大学 CELL 教育論集』7 巻：31-37
- ・ 「アニメ聖地巡礼を活用した地域活性化：静岡県沼津市・奥駿河湾海浜祭の事例から」（第 15 回情報コミュニケーション学会全国大会）<https://cis.gr.jp/2021/zenkoku.html>